
夢幻の境界

LUNA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢幻の境界

【著者名】

IZUMA

【作者名】

IZUMA

【あらすじ】

いつもと変わらぬ風景と、いつもと違う親しい者たち・・・
幻想郷で起こった誰も気づいていない異変。

そんな物語です。

序章（前書き）

pixivに投稿している小説を転載してるだけです。
できればpixivのほうにもコメントなど頂けると嬉しいです。
<http://www.pixiv.net/member.php?id=1813181>

握った手は温かく、弱々しくも優しさに満ちている。

布団の中でこちらを見上げる老婆の顔は、若かりし日の面影を残している。だが、女にとつてはほんの数日前のように思い出せるあの頃の姿は、今はもうそこにはなかつた。

「

わずかに口を動かした老婆に、女は少しだけ顔を近づけた。

老婆が握る手に僅かだが力を込めるど、小さく笑つた。

女はその手を握り返し、老婆の頬に手を伸ばした。

しわくちゃになつてしまつたが、いつも隣で見ていた愛しい顔は昔と変わらぬ笑顔を向けてくれた。

「どうしたの？」

言つて、女も笑顔を返した。

老婆はそれを見ると、どこか満足気に微笑んだ。

だが、女は何のことが分からず首をかしげた。もしかしたら、さつき口を動かしたように見えたのは、「笑つて」と言つていたのかもしれない。そう考へると、さつきまで自分はどんな顔をしていたのだろうか。心配されるほど情けない顔をしていたのだろうか。もすれば、老婆が「どうしたの？」と聞き、女が同じ言葉を聞き返してしまつていたのかもしれない。しかし、そうなると満足そうな表情の理由が分からぬ。

女は老婆に笑つた理由を聞こうと口を開き、しかし、開いた口は何も語ることなく閉じた。

頬を撫でる手で老婆の前髪をかき分け、こちらを見る優しげな目を見つめる。

まったく、なんて無粋なことを考へていたのか。

女は自嘲氣味に笑つと、老婆に囁いた。

「おやすみなさい

老婆は微かに頷くと、ゆっくりと目を閉じる。

女は老婆の頭を撫で、その後、額にキスをした。

「さよなら。いつか、またここにいらつしゃい」

女が顔を上げた頃には、老婆はもう一度と目を開く」とはなかつた。

縁側に座る女の髪を、夜風がなびかせる。

金糸のような美しい髪は、月の光を浴びて夜空に輝く星のよつとも見える。

ただ、月の光で輝いているのは髪だけではなかつた。

女の頬を涙が伝い、きらきらと光りながら膝へと落ちる。しかしそれを拭つこともせず、女は縁側に座りながら月を見上げていた。

千年以上も昔から見ていて月は変わることなく女を照らしているところに、周りにいる者たちは瞬く間に変化していく。

流れるような美しい黒髪は白くなり、軟らかくたおやかな手はしわだらけになつていく。そんなことを、あとどれだけ見守り続けなければならないのか。

女はうつむき、顔を両手で覆つた。

止まることのない涙は手のひらを濡らし、指の隙間から滴となつて落ちていく。

「……」

どれくらいそうしていただろうか。微かに聞こえていた虫の鳴き声は止み、涙もいつの間にか止まつていた。

女は顔を上げると、頬を濡らしている涙を袖で拭つた。

ふと右を見ると、そこには見慣れた人影があつた。

人魂を纏い屹立する女性は、静かに歩み寄ってきた。

「幽々子？ どうしてここに……」

幽々子と呼ばれた女性は、女の側まで歩み寄り、普段とは違う表情でこう言った。

「紫、あなたに話したいことがあるの」

視界が徐々に掠れ、煙に包まれるかのように世界が白で塗りつぶされていく。

知るはずのない　だが確かに記憶にある光景がよく知る人物の記憶だと気付くと同時に、それは霧が晴れるかのようにかき消されていった。

そして白の世界に一筋の光が差し込み、少女は目を覚ました。いままで見ていた彼女の記憶を全て忘れたままで。

この世界には、妖怪や妖精、神靈などの存在がいる。もちろんそれらの存在はどこにでもいるわけではない。

『幻想郷』と呼ばれる、山間の一部の土地にのみいるのだ。

そんな小さな空間を何故ひとつ的世界として見るのかといふと、それには大きな理由がある。

幻想郷はふたつの大きな結界によつて外界から隔離されているのだ。完全に外界から隔離され認識すらできないのだから、それはもうひとつ的世界と呼べるだろつ。

ひとつは『幻と実体の境界』と呼ばれ、この結界によつて外界で忘れ去られ、幻となつた生物や道具が幻想郷に流れ込むようになつてゐるのだ。そのため、幻想郷では外界で力を失つた妖怪たちが集まるようになつた。

そしてもうひとつは『博麗大結界』と呼ばれる常識の結界である。これは幻想郷を『非常識の内側』とすることにより、外界の幻想を否定する力を利用して幻想郷を保つという、論理的な結界である。当然これほど強大な結界を支えるには、これらを管理できるもののがいる。

『幻と実体の境界』は、現在の幻想郷の創造に立ち会い、ふたつの結界を造つた張本人である、八雲紫という妖怪である。彼女は千年以上も生き、この幻想郷を守り続けている。實際は、彼女の式神である八雲藍という九尾の狐の妖怪が管理しているのだが。

『博麗大結界』は、代々博麗の巫女が博麗神社に住みながら管理しており、現在の巫女である博麗靈夢も、先代から受け継いだ神社を守りながら結界の管理を続けている。

もつとも、管理といえるほどのことはしておらず、結界が緩んでいないか見張つてゐるだけである。しかも神社でありながら、靈夢を慕う妖怪たちが集まるせいで人間たちはほとんど近寄らなくなつ

てしまつてゐる。そのため信仰は雀の涙ほども集まらず、お賽錢は言わざもがなである。お賽錢が期待でいな以上、別の方法で収入を得るしかなく、靈夢は幻想郷で起こる異変の解決を生業としている。

ただ、最近では異変と呼べるほどのものは起こつておらず、一番の収入源を断たれた博麗神社は深刻な財政難に陥つてゐた。

「……お腹すいた」

財政難による食料不足でまともな朝食すら食べれずにいた靈夢は、縁側に座つてお茶をすすりながらそんなことを呟いた。

小鳥のさえずりを聞きながらのんびりとお茶を飲む。そんな誰もが羨むような生活を腹の虫が台無しにするものだから、靈夢は特に感慨に浸ることなく空を見つめるばかりだった。

このまま空腹を耐え続けるくらいなら、もう一度布団に包まつて寝てしまおうか、とも思う。

12月にもなると朝は屋内の空氣も冷え切つており、布団の温もりにはなかなか捨てがたいものがある。

そんなことを考えながら空を仰いでいると、突如靈夢の隣の空間が裂けた。

裂け目からは無数の眼光が見え、全てを飲み込みそうな、そんな不気味さを持つてゐる。

普通の人間が見れば愕然とする光景も、靈夢にとつてはもはや見慣れたものだつた。

「何か用？」

靈夢が呼びかけると、空間の裂け目から一人の女性が現れた。

それはもはや理解の範疇を超える有様だつた。が、この幻想郷をよく知るものなら、この不可解な現象も納得できる。

幻想郷に生きる人間や妖怪たちは、それぞれ特殊な能力を持つてゐる。

この世の道理では測れぬそれは、ここでは日常的に使われてゐる。

そのため、初めて見たものなら驚きはすれど、理解できぬほどのこ

とではないのだ。

ただし、彼女　　八雲紫の能力は、そんな幻想郷に生きる者たちでも理解するには強力に過ぎるものではあるのだが。

『境界を操る程度の能力』　境界と名の付くもの全てを操ることのできるこの能力は、神に匹敵する力とも言われており、物理的なものから概念的なものまで、あらゆる存在の境界を操ることができるのだ。

いま紫が出てきた空間の裂け田はスキマと呼ばれ、ふたつの空間の境界を操り、本来存在するはず距離を”無くした”のだ。

紫は意味もなくにやにや笑いながら靈夢の前に姿を現すと、「うきげんよう」などと言つてきた。

靈夢は返事をするのも嫌になり、まだ僅かに湯気の立つお茶を飲んだ。

そんな靈夢の素つ氣ない反応など意にも介さず、紫は靈夢に話しかけた。

「相変わらず」の神社は食料不足なのね。私が何か惠んであげましょうか?」

どうして博麗神社の食料事情を知っているのか、などと聞く必要はない。

紫が現れてからも、靈夢の腹の虫は鳴り続けているのだ。紫でなくともそれなりの勘は働くというものだ。

「結構よ。あんたなんかに恵まれるぐらいなら餓死したほうがましよ」

そう言い放つと、靈夢はわざとじくじくそっぽを向いた。

あんまりな物言いだが、それがただの強がりだということは明白だつた。

靈夢との付き合いが長い紫には、靈夢がどう言ひ返していくか分かつていたのだろう。紫は靈夢の横顔を見ながらくすくすと笑っていた。

しかし、靈夢は何度繰り返したかも分からないこのやり取りに、

いい加減飽きはじめていた。

何か紫が悔しがるようなことでも言つてやりたいところだが、そんなことを言えるような状況ではないので、もつと別の方法でこのあつたりな空氣を開拓することにした。

「まあ、たまにはお言葉に甘えてもいいかもね」

いつも突っぱねた態度をとつてはいるのだが、反撃には充分だひつ。どんな顔をしているのだろうか。そんな期待を抱きながら、ちらりと紫の顔を窺い見た。

だが、紫の反応は靈夢の予想の斜め上のものだった。

「嫌よ」

思わず手に持つていた湯呑を落としそうになり、慌ててそれを支えた。

まさかそんなことを言われるとは思つていなかつた靈夢は、湯呑を支えた姿勢のまま紫の顔を凝視し、口をぱくぱくとせせる。

「あんたから言つてきたんだしょ」とか「じゃあなんで言つたのよ」とか、言いたいことはあるのに、口がうまく動かない。

紫を驚かすために意地を捨てて甘えた靈夢としては、紫の発言は許しがたいものだった。

「な、あんた……どういふことよそれー。先に言つたのはあんただし、そ、それに、私があんたに頼みごとしてるのよ？」

どもりながらもなんとか言い返してみたが、紫は依然笑つたままこんなことを言つた。

「たしかに靈夢が私にあんなことを言つるのは初めてね。でもそんな靈夢はつまらないわ」

その言葉に腹が立つのを通り越して呆れ果ててしまつた。

ただ、呆れたのは紫の発言にではなく、それを予想できなかつた自分に対してだ。

紫が子供じみた悪戯をしたり、からかつてきたのは今回だけではないのだから、そのことを考えれば容易に想像できたはずなのだ。空腹で頭が働いていなかつたと言えばそれまでだが、紫にしてや

られたという感が否めないのもまた事実である。

もはや言い返す気力すらなくなつた靈夢は深くため息をついてうなだれた。

その様すら予想の範囲内だったのか、靈夢から顔は見えていないが紫が笑つてゐるのは分かつた。

「そんなに落ち込まないでよ。そうだ。久しぶりに宴会でもやりましょ。材料を持参させればタダで御馳走が食べれるわよ？」

靈夢の知り合いには宴会好きのものが多い。何かにつけて宴会を開いては、後片付けもせずに帰つて行くのだ。

まともな食事にありつけるのはありがたいが、その後のことを考えると少々憂鬱になるが、いま靈夢が気になつてゐるのは別のことだつた。

「久しぶりつて……宴会ならつに最近やつたばかりじやない。たすがのあいつらも集まらないんじや」

ないかしら、とは続かなかつた。それは考えが変わつたからではない。

紫の表情に驚いてしまつたからだ。

きつと靈夢は紫のこの表情を決して忘れることはないだろう。

田をボタンのように丸くして、顔を強張らせていたのだ。

突然のことでのじつしたらいいのか分からず、靈夢は戸惑いながらも紫に問い合わせた。

「ど、どうしたのよ？ 私いま変なこと言つたかしら？」

靈夢が言葉をかけてから数瞬後、まるで突然靈夢が目の前に現れたかのように驚いてから、紫は顔を右手で覆つて靈夢から田を逸らしてしまつた。

いまままで見たこともない紫の姿に、靈夢は動搖を隠せずにいた。改めて先ほどの会話を振り返つてみたが、やはりおかしなことは何もなかつたと思う。

一体どうしたというのか。

紫はどこかを見つめたまま動かないで、靈夢はもうとつとつに冷

めてしまつたお茶をぐこと飲んだ。

「今日はもう帰るわ」

「え」

急に動き出したかと思つと、紫はそう言い残してスキマの中に引っ込み、間髪おかずにはスキマも閉じてしまつた。

ぽかんと口を開けたまま硬直していた靈夢は、スキマが完全に消えてからじめらしくしてよつやく止氣に戻り、残つていたお茶を飲み干してこう呟いた。

「なんなのよ」

紫のことは気になるが、いつも何を考えているのか分からぬし、紫の行動をいちいち気にかけていたきりがない。

靈夢は空になつた湯呑を縁側に置いて再び空を見た。

流れる雲を眺めながら、いまだに止まらぬ腹の虫の鳴き声に耳を傾ける。

まるで「なぜ紫の提案に乗らないんだ」と抗議しているかのようだつた。

「宴会かあ……」

また呟いて、靈夢は湯呑を持つて室内に戻る。

「集まるかしら」

わざかに期待を込めた言葉に返事をするよつて、腹の虫がまた鳴つたのだった。

霧雨魔理沙にとつて、この魔法の森は天国のような場所だつた。言い過ぎかもしれないが、そう思えてしまうほど特別なのだ。魔法使いである魔理沙は、この魔法の森に自生している茸を採取し、それを様々な方法で薬品に加工したり、直接使って何か魔法が発動するまで実験を繰り返す。

そしてその結果をすべて書き留め、自作の魔道書を作つてゐる。ただ、それはあくまで魔理沙の場合に限る。

”本物の魔法使い”なら、そんな地道な実験などほとんどしない。そう、魔理沙は厳密には魔法使いではないのだ。

魔法使いには二種類あり、生まれながらの魔法使いと、人間が魔法使いになる者である。

前者は最初から魔法が使えるというだけで、普通の人間と変わらない。そのため、捨虫という成長を止める魔法の習得とともに、完全な魔法使いになれる。これはある種の不老不死のようなものである。

後者は修行によつて魔法を習得し、捨食の魔法により食事を魔力で補えるようになつて初めて魔法使いと認められる。

魔理沙は後者に当たるのだが、捨食の魔法は習得していない。いや、正確には習得するつもりがないのだ。

不老不死に興味がないわけではない。ただ、必要ないだけなのだ。たしかに魔法の修行や実験は楽しいし、死ぬまで続けていたい。だが、不老不死になつてまで続けよつとは思つていないので。魔法の実験をしているとき、もつと時間があれば今以上の結果を出せる、という場面は何度もあつた。魔法の森で茸の採取をしていふとき、危険な胞子を吸い過ぎて死にかけたこともある。人間の体は弱い。

それでも捨虫や捨食の魔法を習得しないのは、ひとつ意地があ

るからだ。

魔理沙は、人間である自分が好きなのだ。

人間という限られた時間の中で生きる自分に誇りを持つているのだ。

千年以上生き続ける妖怪や魔法使いからしたら、魔理沙の一生はあまりに短い。空中で輝いては一瞬で消える火花のようなものだらう。

そんな儚い命でも、生きている証は必ず残る。

それは徹夜して書いた魔道書であったり、死ぬ思いをしながら収集した研究材料だったり、誰かの記憶の中だったり

そういうたものは、きっと、限られた時間の中で残していくからこそ輝くのだと思う。

たとえ無様な人生になろうとも、魔理沙にとつては魔道書や研究材料よりも大切な宝物になるのだ。

湿気に富んだ地面は、踏むたびに足が沈む。

周囲に生い茂る木の幹には苔が生え、独特の匂いが辺りを満たしている。

「さて、今日はこれくらいにしどくか」

採取した草を詰め込んだ袋を持って、魔理沙は歩き出した。

木の根がいくつも飛び出ているが、魔法の森に通いなれている魔理沙はそれらを苦もなく避けていく。

普段は篠で空に飛びながら移動するのだが、魔理沙の家はこの森の中にあるし、森の中で飛ぶのは危険が多い。

「ああー、だいぶ冷えてきたなあ」

森の中はあまり風はないのだが、やはり十一月ともなると空気が冷えている。

頬を風が撫でるたびに刺すような痛みが走る。

いま鏡を見たら、間違いなく頬は赤くなっているだろ？
空いてる手に息をかけながら、魔理沙は木の根を軽快に避けながら家へと向かう。

今日は普段見かけない珍しい茸が手に入り、心なしか足が軽く感じる。

だからだろ？ 頬を刺すような痛みや、スカートについた茸も気にならない。

「さて、今日はどんな魔法ができるかな？」

そんな独り言を呟くと、魔理沙は鼻歌交じりに歩を速めた。

結果から言えば、実験は失敗に終わった。

採取した貴重な茸を半分以上使つたにもかかわらず、新しい魔法はひとつも発現しなかった。

以前、同じ茸を採取したことがあるのだが、量が少なく、十分な実験ができなかつた。

だから今回は今までやれなかつたことをやつてみたのだが、その結果がこれではあまりに納得がいかない。

ただ、材料ならまだ残つているのだが、いかんせん実験器具が足りない。

「こりやひとりじや無理だな」

今回の実験の結果を書き留めた魔道書を閉じ、両手を上げて背を伸ばすと、じきじきと小気味よい音がした。

長時間椅子に座り続けていたので、強張つた体をほぐすのも兼ねて思いきり椅子から立ち上がつた。

だが、すぐ後ろに積み上げていた魔道書に椅子がぶつかってしまった。

適当に積み上げていただけだつた魔道書の塔は、案の定埃を舞い上げながら崩れ落ちた。

「つ……くそ」

魔理沙は額に手を当てながらそんな悪態をついた。

実験が失敗に終わったこともあり、気づかぬつむじいらついていたらしい。

気分を落ち着かせようと机の上に置いてある湯飲みを取った。

お茶はすでに冷め切っていたが、今はこの冷たさが丁度いいかも

しない。

ぐいと中身を飲み干し、机の上に湯飲みを置いた。

崩れてしまつた魔道書を積みなおし、魔理沙は壁にかけてあつた帽子を取つた。

帽子はつばが大きく装飾品の少ない、これぞ魔法使いと呼べるような典型的なものだ。

魔理沙はいざという時、中に物を詰め込んで運ぶことができるこの帽子を気に入つてゐる。

帽子を被り、残りの茸が入つた袋とマフラーを持つて、他の積み上げられた魔道書を避けながら扉まで進む。

「さて、やつぱり行くならあそこしかないよな

魔理沙は扉の横に立てかけてある簾を取り、家を出た。

外はすっかり暗くなり、森の中はまるで全てを飲み込んでしまいそうな闇を湛えている。

普段から通いなれでいるとはいへ、こんなとこりを通るのはあまりに危険だろう。

だから、今回は徒歩とは別 の方法で移動する。

魔理沙は玄関の前でマフラーを首に巻いて、簾にまたがり宙に浮いた。

森の中を簾で飛んで移動するのは危険だが、森を越えていく分には問題ない。

空を飛ぶとなると、森の中より遙かに冷える。

簾の柄をしっかりと握り、森の少し上辺りを飛ぶ。

空は高いところに行けば行くほど空気は冷たくなる。だから極力

低空で飛ぶ必要があるのだ。

目的地は魔法の森の中　　”本物の魔法使い”が住む洋館である。その魔法使いは魔理沙の知り合いで、これまで魔法の実験で何回か手伝つてもらつていてる。

「あいつ居るかなあ……居なけりや勝手に借りてくか」
雲ひとつない夜空に浮かぶ満月が、神秘的な光で魔理沙を照らし出していた。

魔法の森の一角、そこだけ木の生えていないところがある。

知り合いの魔法使いが住む洋館はそこに建つていた。

立派なとは言いがたいが、汚れひとつなく清楚さと気品を漂わせている外見は、この魔法の森には不釣り合いなほどに綺麗だ。

魔法で保護しているのか、それともこまめに掃除しているのか。おそらくは前者だろう。いくら小さいとはいえ、汚れるたびにいちこち掃除していただきりがない。

魔理沙は簾から飛び降りる形で着地すると、洋館の扉をノックした。

こんこんと木製の扉特有の音が静かな森に響く。

「おーい、居るかー」

返事はない。

ただ、人が居ないわけでもない。

魔法使いである魔理沙は、近くに強い魔力があれば探知できる。そして、洋館の中にはかすかだが魔力を感じる。

かすかに感じるだけなのは、魔法を使つていない時は無駄な魔力が漏れ出さないようにしているからだ。

ただ、不思議なのはもうひとつ強い力を感じることだ。

しかもそれは魔力とは違う、妖怪の持つ特殊な力　　妖力なのだ。それも隠し切れないほど強大な。

ここに自分以外の客人が来るのは珍しいことなので一瞬と惑つたが、落ち着いてみれば、それは魔理沙がよく知るものだということはすぐに分かつた。

もう一度ノックしようかと思ったが、先ほどのノックが聞こえていないはずがないだろうと思い、魔理沙は躊躇なく洋館の扉を開けた。

洋館の外見とは違い、リビングにはアンティークの類はほとんどなく、質素な家具がいくつか置いてある程度だ。部屋の中央には丸型のテーブルがあり、それを挟む形で椅子が一脚並べてある。

魔理沙はここに来るたび、薦められてもいなのにその椅子に座つてはお茶をたかつたりしている。

しかしその椅子も、いまはなんの意味もなしていなかつた。

洋館の主とその客人は椅子に座らず、なぜか部屋の奥に立つていたのだ。

二人は返事もしていないので魔理沙が入ってきたことに何の驚きもせず、ただ一瞥するだけですぐに顔を見合わせていた。

魔理沙は少しむつとしたが表には出さず、簾を扉の横に立てかけてから一人に近づいた。

「よおアリス。それと珍しいな、紫がここにいるなんて」

そう言って魔理沙は右手を少し上げて挨拶の代わりにした。

洋館の主 アリス・マーガトロイドは再び魔理沙を見ると、目だけをこちらに向けて隣で魔理沙を横目で見て、紫に何事か呟いた。

ただ、魔理沙にはアリスの口の動きが見えただけで、声は一切聞こえていなかつた。

おそらく魔法で魔理沙に聞こえないようにしているのだろう。何を話していたのか気になつたが、それ以上に気がかりなのは二人の態度だ。

あきらかにこちらを警戒している。

今度こそ魔理沙は眉を顰めたが、すぐに自分の勘違いに気が付いた。

さつきは一人が魔理沙を警戒しているとばかり思っていたが、そうではない。

二人の目は少し困ったような色を帯びていたのだ。

「なんだよ。どうかしたのか？」

「いえ、ちょっと宴会の話をしてたのよ」

口元を少しだけ笑みの形にしながらアリスが答えた。

「宴会の話？ ならなんで私に聞こえないようにするんだよ」

「紫と一人だけで企画してたのよ」

そう言つてアリスは紫の顔を見た。紫はわずかに目を見開くと、すぐにいつもの胡散臭そうな笑みを浮かべながら「ええ」と言いながら頷いた。

だが、アリスの発言が嘘であることくらい魔理沙にだつて分かる。しかし今それを問うたところで、満足のいく答えを得られるとは思えない。それに深追いしてアリスの機嫌を失えば、わざわざ「こ」に来た意味がなくなってしまう。

アリスと紫の態度や発言は気になるが、今は棚に上げておく」とにする。

「……そうか、とりあえず明日はやめてくれよ。ちょっとやりたいことがあるんだ」

白毛を出るときからずっと持ち続けていた袋を持ち上げながら言った。

アリスと紫はきょとんとした顔をしたが、アリスはすぐに合点がいったらしい。

「ああ、実験の手伝いを頼みに来たのね」

アリスには何度も魔法の実験で世話になつていてる。

魔理沙が見せた袋を一目見ただけで、魔理沙がこんな時間に訪ねてきた理由に気づいたようだ。

一人のやり取りを見て、紫もようやく事情が飲み込めたらしい。

一步下がると「邪魔者は帰るとするわ」とだけ言い残すと、懐から扇を取り出し、閉じたままのそれで空間を切り裂くような動きをしてスキマを作ると、アリスと魔理沙の返事も待たずスキマの中へと入つていった。

スキマが閉じるとほぼ同時にアリスがこちらへ歩いてきた。

「さて、今日はどんな実験を手伝わせるのかしら?」

肩まで伸びたアリスの金髪が揺れる。

アリスの髪は同じ金髪である魔理沙も羨ましくなるほど綺麗で、肌の薄さも相まって人形のようにも見える。もともとアリスのことは美人だと思っているが、夜の暗さの中で見ると、普段とは違う妖艶さを醸し出しているように感じる。

ただ、魔理沙の返事が遅れたのはそんなアリスに見惚れていたからではない。

さっきまで魔理沙に対して不自然な視線を向けていたにもかかわらず、今はもう魔理沙の見慣れた笑顔を見せてきたので、思わず面食らつてしまつたのだ。

「あ……と、珍しい茸が手に入つたんだけど、私一人じゃ限界があるらしい」

「そう。私にできることならいくらでも手伝つてあげるわ」

魔法使いは魔法の実験やその結果を他人に見せない。

それは偏屈だからというわけではなく、安易に見せてはならないことがいくつもあるからだ。

魔法というのは全てが人助けのためにあるわけではない。

魔法の種類は無数にあり、その中には傷を癒すものから、容易く人を殺せるようなものもある。

そして、誰にも知られてはならないようなものも……

だから他の魔法使いの実験を見れるというのは貴重なことであり、新たな魔法が発見できれば自分もその魔法を習得することができるのだ。

アリスは快諾し、魔理沙を奥の部屋へと案内する。

そこは魔法の実験を行うため特別に設けられたもので、魔理沙も何回か入ったことがある。

アリスは部屋の扉を開け、魔理沙を先に入るよう促す。

魔理沙は茸の入った袋を肩から提げ、アリスの横を通り部屋の中に入った。

部屋の中には木製の棚がいくつもあり、無数の薬品や実験素材が瓶に詰められた状態で整然と並べられている。

瓶にはひとつずつラベルが貼られ、中身が一目で判別できるようになっている。

魔理沙はこの部屋を見るたびに自分の家と比べてしまつ。初めてこの部屋を見たときは、呆然を通り越して苦笑いを浮かべてしまつたものだ。

魔理沙が魔道書などが並べられた机に袋を置くのと同時に、アリスが部屋の扉を閉めながら中に入つてきた。

「さて、はじめましょうか」

手をぱんと打ち鳴らし、アリスは魔理沙の隣に立つた。

「そうだな」

それに応えるように、魔理沙は袋の中から茸をいくつか取り出した。

博麗神社の裏には大きな湖がある。

周囲は森で囲まれており、日中は霧で覆われていて視界が非常に悪く、霧の湖とも呼ばれている。

この湖には多くの妖怪や妖怪が集まるため人間はほとんど寄り付かず、幻想郷の中でも比較的危険な場所に当たる。

ただ、その湖には妖怪や妖怪すら集まらない場所がある。

湖の畔に建つ洋館 紅魔館である。

名前とおり真っ赤なレンガを使用したひときわ異彩を放つ「デザインの洋館」なのだ。また、廊下には窓が少なく、日の出ている間はカーテンで閉め切られているので不気味な雰囲気を放っている。

それというのも、紅魔館の主が日光を嫌っているからである。

嫌っているといつても、ただ眩しいのが苦手ということではない。日光を浴びることができないのだ。

その人物は妖怪の中でもトップクラスの力を持ち、多くの妖怪が畏れ決して逆らうことのない存在、吸血鬼なのだ。

吸血鬼は日の光を浴びると蒸発してしまったため、紅魔館の廊下や部屋の窓はすべて閉め切られているし、吸血鬼の危険性を知っている妖怪たちは滅多なことでは紅魔館に近づかない。

その吸血鬼は圧倒的な力を揮い、妖怪のメイド達を使役してほどの雑用を任せている。が、妖怪たちは基本的に自分勝手な性格をしているので、メイドとしての仕事はほとんどできず、まるで役に立つていないうのが現実である。

それでも役に立たないメイド達を雇っているのは、それを従え、見事な采配で仕事をこなさせているメイド長がいるからだ。

吸血鬼も彼女の仕事ぶりと従順さを気に入つており、身の回りの世話はすべてそのメイド長に任せている。

吸血鬼に従える優秀なメイド長。そんな話を聞けば、さぞかし強

い妖怪なのだろうと思うところだが、そのメイド長は妖怪でも妖怪でもない　ただの人間なのだ。

ただの人間といつても、吸血鬼がごく普通の人間を雇うはずがない。

幻想郷に住む妖怪たちは何かしら特殊な能力を持っているのだが、彼女のそれはその中でもかなり稀有な能力なのだ。

吸血鬼はその能力と優秀さから彼女をメイド長とした。

彼女も主へ絶対の忠誠を誓つており、日々メイド長としての業務を完璧にこなしていた。

「……ふう

メイド長である十六夜咲夜は、館のモップがけを終わらせ一息ついていた。

ただでさえ紅魔館は広く、気が遠くなりそうなほど部屋があるといふのに、他のメイド達はまるで役に立たないのでほとんど咲夜ひとりで仕事をこなさなければならぬのだ。溜息のひとつづらにつきたくなる。

妖怪のメイド達に下手な指示を出せば仕事が増えるだけなので、今は失敗されても被害の少なくしてすむ庭園の掃除を任せている。もつとも今は”誰も動いていない”のだが。

いや、正確に言えば、”この世界が動いていない”のだ。

風は吹かず、木々は揺れず、日は沈まず、音は響かない。咲夜以外のものはすべて凍りついたかのように動かないのだ。

これが咲夜の持つ絶対的な能力　『時間を操る程度の能力』である。

時間を加速や遅延、停止させることができるこの能力を使い、咲夜は広すぎる紅魔館の掃除をまったく時間をかけずに終わらせることができるのだ。もちろん咲夜自身は疲労するのだが、時間を止め

ていた分自由な時間も増えるし、休憩もでき、他のメイド達の様子を窺うことができる。そもそも時間を止めなければこの洋館の掃除を終わらせるなどできるはずがない。

「さて、そろそろいいかしら」

咲夜は能力を止め、時の流れを元に戻した。

瞬間、今まで止まっていたすべてのもが生き返ったかのように動き出した。吹き抜けるか風が木々の間を吹き抜けるたびに枝葉が揺れ、かさかさと音を立てる。この世界に存在するものは時間が止められていることに気づかず、その間の記憶も存在しない。それはまさに咲夜だけの世界と言えるだろう。

咲夜は肩に手をあてる、首を左右に捻った。

時間を止めている間は埃が舞わないで掃除が楽なのが、長時間の能力の使用はさすがに疲れる。もつとも、時間が止められるというのに長時間と表現するのもおかしな話ではあるのだが。

とりあえず午前中にやるべきことは終わったので、咲夜はモップをしまってから自室へと向かった。

かつかつとヒールの音が廊下に響く。咲夜以外に誰もいない廊下は、まるで時間が止まっているかのように静かだ。

少しサボつてみようか。ふとそんなくだらないことを考えてしまつた。仕事がないのなら、いつ主人に呼び出されてもいいように自室で待機していなければならぬのだが、周りに誰もいないとなるとそういうことも考えてみたくなるものだ。

吸血鬼は夜行性なのでこの時間に起きてくることはないだろう。他のメイド達は外にいるのだから、誰かに見られるということはないだろう。

「……誰もいないわよね」
もう一度だけ辺りに誰もいないことを確認してから、窓に近づいてカーテンを開けた。

差し込む光が廊下にあふれる。

今まで薄暗い廊下にいて光になれていなかつたので、その光は

咲夜には少し眩しかつた。

瞼を半分だけ閉じ、手のひらを田の上に当てた。

田が光に慣れたころにふと下を見ると、庭園でメイド達が簾を剣のようすに振り回して遊んでいるのが一階からでもはっきりと見えた。その周りに落ち葉が散らばっているのも見えるので、落ち葉を集めてから遊び始め、それを踏み散らかしたといつところだらうか。

「はあ」

思わず溜息が出ていた。

このままでは自分が尻拭いをしないといけなくなる。

咲夜はカーテンを閉めてから窓を離れ、階段へと向かおうと左へ振り向き

「おはよう、咲夜」

一瞬、頭が真っ白になつたが、身体は無意識のうちに元気もそうしているように動いてくれた。

「おはようございます。お嬢様」

田の前には齡十にも満たぬであろう少女が立つていた。

しかし、普通の少女とは少し違つていた。

まず田が留まるのは背中に生えた巨大な翼だ。へたをすれば少女の身体より大きいかもしれないその翼は、蝙蝠を彷彿ぼうふつとさせる形をしている。さらに、田は血のようすに紅く、それでいて獰猛な肉食獣のような冷たさを孕んでいる。

あまりに異様な姿をしたこの少女は、その実、500年以上生きた吸血鬼であり、この紅魔館の主なのだ。

「珍しいですね、こんな時間に起きられるなんて」

努めて平静を装つてそう言つた。

吸血鬼の少女、レミリア・スカーレットは返事をするわけでもなく、まだ眠たそに田をこすつた。

吸血鬼は日が沈むの頃に起床し、田の出前に寝るのだ。だが今はまだ10時を過ぎたばかりで、レミリアが眠りについてから数時間

しか経つていなかった。

レミリアは氣だるげに背伸びをしてから大きく息は吐いた。

次に顔を上げたときにはもう眠たそうな少女の顔ではなく、紅魔館の主にふさわしい吸血鬼の顔になっていた。

「なんだか胸騒ぎがするのよ」

「胸騒ぎですか？」

「そう。昨日の夜から感じてたんだけどね。最初は氣のせいだと思ったけど、今日も感じるとなると……なにがあるかもしないわね」レミリアはそう言うと、顎に手を当てた。

咲夜自身は特になにも感じていないのでなんとも言えないが、自分の主が真剣な顔でそう言つていてるのに真っ向から反論できるはずがない。

「それは紅魔館に関係することなんでしょうか？」

「漠然としたものだからねえ……」ととりあえず氣をつけておいて。私は念のために起きてるから。それと門番にも伝えておいて」それだけ言い残すと、レミリアは踵を返し白室へと歩いていった。咲夜は「かしこまりました」と言つてから軽くお辞儀をして、レミリアが見えなくなるまで見送った。

「胸騒ぎねえ」

先ほど閉めたカーテンを見ながらぽつりと呟いた。

レミリアの言う胸騒ぎとは違うのだが、『門番』といつ言葉を聞いたときから嫌な予感ならしている。

もう一度窓に近づいてカーテンを開け、遠くに見える正門に視線を向けた。

「やつぱり」

門の前には侵入者を防ぐために門番がいるのだが、その門番は必要以上に頭を垂れているのだ。それは客人に対するお辞儀とは明らかに違つた。

空を見れば、青の絵の具で塗りたくつたよつな心地よいほどの快

晴。

またに昼寝日和である。

冬の風は冷たかったが、雲ひとつない空から注ぐ日の光がそれを紛らわしてくれる。

かさかさと舞う落ち葉の音が子守唄のように耳をくすぐる。

後ろのほうで妖精のメイド達が騒いでいるが、その声すら子守唄の一部になりつつある。

こんなにも気持ちがいいのだから、少しごらごら昼寝しないと損というものだ。

なにしろ門番というのは立っている以外、特に仕事がないのだ。侵入者が来ればそれなりに忙しくなるのだが、最近ではその侵入者すらいなくなってしまった。いや、いるにはいるのだがあまりにすばしつこく、捕まえることができないのだ。その度にメイド長に叱られてしまうのだが、それにも慣れてしまった。

どれほど時間が経つんだろうか。いつの間にか妖精たちの声が聞こえなくなっている。その代わりに足音がこすりこすり近づいて

「おはよう、美鈴」

「――」

背中越しに声をかけられ、紅美鈴^{ほんめいりん}は飛び起きた。

いままで夢うつつでいた美鈴は突如現実の世界に引きずり出され、慌てて振り向くと真後ろに立っていたメイド長を見て姿勢を正した。

「お、おはようございます……咲夜さん」

美鈴にぴったりとくつついて立っていたのだから。頭ひとつ分小さい咲夜を見下ろす形になつた。

「ずいぶんと気持ちよさそうに寝てたじやない」

いまの空模様と同じぐらい晴れやかな笑顔で言つてゐるのに、美鈴の背筋には冷や汗が浮かんでいた。なまじ美人なだけあつて異様な淒みがあるので。

美鈴は引きつった笑みを浮かべながら、無様な言い訳を取り繕つた。

「いや～いい天気ですね！」「こういう日は咲夜さんも一緒に、いつの間にか咲夜の右手には一本のナイフが握られていた。ナイフ使いらしい手際の良さではあるが、いつたいどこから取り出したのか。もしかしたら紅魔館の敷地内の至る所にナイフを隠していて、時間を止めてからそれを持ってきているのだろうか。

これ以上の抵抗は無駄だと悟った美鈴は、呆れ顔でこちらを睨んでいる咲夜に先ほどとは違った意味で頭を垂れた。

「すみませんでした。やっぱり刺激がないと眠くなってしまって…」

「まったく…とにかく昼寝もほどほどにしなきよー。それとお嬢様から伝言があるわ」

呆れ顔から一変して真面目な顔になつた咲夜を見て、美鈴も門番にふさわしい表情になる。

「お嬢様がなにか胸騒ぎがすると言つていたわ。まだ漠然として、ここに関係することがどうかは分からぬけど、とりあえず警戒しておいて。異変を感じたらすぐに連絡すること」

「了解しました」

美鈴の返事に満足したのか、咲夜は一度だけ頷くと屋敷へと戻つていった。

見れば、今まで騒いでたメイド達が真面目に仕事をしている。ここに来る前にメイド達を叱つていたらしい。咲夜が現れる前に静かになつたのはそのせいだろう。

「ふわあ～」

そんな間抜けなあくびが出たのは、咲夜の背中が小さくなつてからだ。

緊張が解けたせいか、また眠気が襲つてきたのだ。

そもそも警戒しろと言われても、いったい何に警戒しろというのか。変わったところなどないし、どこを見ても平和の一言で片付け

られてしまつ。

美鈴はもう一度あくびをして、振り向いた。

「痛つ！」

後頭部に突き刺すような痛みが走つたのはその時だつた。何事かと痛みのするところを触つてみれば、本当に一本のナイフが突き刺さつていた。

なるほど、眠氣を覚ますにはちょうどいい刺激だつた。

紅魔館の地下には巨大な図書館がある。そこには貴重な文献や魔道書が収められた本棚が数多く存在しており、その量は膨大で、図書館の本をすべて読めば知らないことなどなにもないと言つても、過言ではなくなるかも知れない。が、勿論そんなことをしようものなら何百年もかかることは間違いない。なにせ解読が困難な本がいくつもあるうえに、それを解読するために必要な文献すらすでに使われていらない言語で書かれていることがままあるのだ。普通の人間では　いや、千年も生きられる妖怪でも諦めてしまうだろう。

しかも広大な図書館の中に無数の本棚が規則正しく並べられた光景は、さながら地下の迷宮に迷い込んでしまったかのような錯覚に陥つてしまつだろう。

しかし、そんな図書館に住み着き、あまつさえ全ての本を読み解こうとする変わり者がひとりいる。

その変わり者にして生糸の魔法使いであるパチュリー・ノーレッジは、捨虫の魔法のおかげで年を取ることがないし、『本の傍に在る者こそ自分』と考えているほど本を読むこと以上に素晴らしいことはないと思つており、図書館の本をすべて読むといつ偉業を成し遂げるにはもつてこいの人物なのだ。

古びた本特有の匂いが充満する地下の図書館で、パチュリーは魔法の研究に勤しんでいた。

机の上には解読中の魔道書が広げられ、その周囲には参考にするための文献がいくつも置かれている。どれもページの端はボロボロで、表紙に書かれていたタイトルであろう文字はかすれてほんと読めない。もはや化石じみたその本は、中身を読まないと何の本かわからなくなつっていた。そんな状態であるため、必要な本をこの図書館から見つけ出すのは至難の業で、パチュリーもどこに何の本があ

るのかほとんど把握できていないのだ。

そのためパチュリーは本の管理をすべてひとりの司書に任せている。

小悪魔と呼ばれるその司書は図書館のどこに何の本があるのかを把握しており、パチュリーはほしい本はいつも持つてきてもうっている。のだが、本を読むことだけに集中したいパチュリーは、その他の雑用もすべて小悪魔に任せており、パチュリーの使い魔である小悪魔も、どんな要求にも文句を言わずしたがっている。

ただ、パチュリーにはひとつだけ文句というか、小悪魔に改善してほしいことがあった。

「……ふう

ティーカップの紅茶を一口飲み、小さく息を吐いた。

ただしそれは、朝の晴れやかな気分で始めた大好きな読書に、紅茶というアクセントを加えられた至福に対してもうない。むしろ今までの至福を邪魔された、という感さえある。

小悪魔に対する改善してほしいところというのにはこのことだ。

紅茶の味が薄いのだ。

原因はいくつかあるだろうが、大体の予想はつく。

紅茶がぬる過ぎるの。時間が経つて冷めてしまつたというのもあるが、それにしてもぬるい。

大方火傷しないように気をつかつたつもりなのだろうが、それは茶葉から十分に成分が抽出されず風味の薄い紅茶になつてしまつた。紅茶を淹れるなら沸騰直後の熱湯でなければならぬといつに……

正しい淹れ方を教えよつか。そんなことを思つて やはり黙つていることにした。いや、思うだけなら何度もあつたのだ。しかし全ての雑用を小悪魔ひとりにやらせておきながら、紅茶の淹れ方ひとつに文句をつけるのは如何なものだろう。そもそもこういう時に主人としての器が試されるのではないだろうか。むしろ使い魔のミスを責めず受け入れることこそ、主人としてのあるべき態度なはず

だ。

何度目かの言い訳を頭の中で巡らしていると、件の小悪魔が分厚い古びた本をいくつか積み重ねて持ってきた。

「パチュリー様、別の本を持ってきました」

言つて、小悪魔は机の上に持つてきた本を重ねたまま置いた。できることなら本が傷まないよう重ねず置いてほしかつたが、

結局、パチュリーは何も言わずに頷くだけにした。

新しく本を持つてきてもらつたことで机の上が狭くなつてきたので、パチュリーは読み終えた本を小悪魔に渡そうと机の隅に置かれたそれを持ち上げたとき、すでに振り返つていた小悪魔の背中越しに見慣れた人影が見えた。

いや、人影と呼ぶにはそれはあまりに歪だつた。なにしろ背丈はパチュリーより頭ひとつ分以上低いというのに、広げればそんな身長より大きくなるであらう翼が生えているのだ。

「レミィ？」

それはパチュリーの友人、レミリアだつた。

紅魔館の主を前にした小悪魔は畏まつて「おはようござります」と挨拶すると、そそくさとその場を離れてしまつた。

パチュリーが友人と二人きりになれるよう気を利かせたつもりなのだろうが、読み終えた本を持つていつてほしかつたパチュリーは、結局、本を元の位置に戻すことになつてしまつた。

「あ、レミリア様も紅茶をお飲みになられますか？」

立ち去ろうとした小悪魔が振り返りながらそう言った。

それを聞いたパチュリーは少し考えてしまつた。レミリアは普段から咲夜の淹れた最高の紅茶を飲みなれている。それに対して小悪魔の紅茶はお世辞にも美味しいとは言い難い。正直、小悪魔の名誉のためにもここは別のものを持つてくるように言つたほうがいいのだろうか。

頭の中であれこれ考えてこらつちこ、レミリアが手を上げて小悪魔を制していた。

「さつき飲んできたばかりだからいい。その代わり机の上を少し片付けてもらえないか?」

小悪魔は「はい」と言つてからパチュリーのもとへと戻り、パチュリーが机の隅に置いた本を持つて本棚の迷宮へと向かつていった。小悪魔の紅茶を断りながら読み終えた本も片付けさせてしまつた。レミリアを見て、まったくすばらしい観察眼と決断力だなと思った。おそらく先ほどのパチュリーと小悪魔とのやりとりを見ていたのだろう。もしかしたら小悪魔の紅茶のことも誰かに聞いていたのかも知れない。

レミリアはパチュリーの対面の椅子に座つた。

「パチエ、一度あの子に紅茶の美味しい淹れ方を教えてあげなさい」予想は的中した。

パチュリーは苦笑いを浮かべながら本にしおりを挟んで閉じた。

「まあそのうちね。で、どうしたのよこんな時間に。なにがあつたの?」

パチュリーは顔についた汚れを拭うかのように手で表情を消すと、今度は眉を顰めながら言った。吸血鬼であるレミリアがこんな時間に起きるのは珍しく、じつは大抵なにか面倒なことが起こる前兆と決まつているのだ。

面倒なこととてのは、幻想郷を巻き込むような異変からレミリアの気まぐれなど様々であるが、ほとんどが後者である。

だから今回もそうなのだろうと高を括つていたのだが、どうやらそうではないらしい。

パチュリーに問われたレミリアはいつになく険しい表情を浮かべていたのだ。

それがパチュリーの態度に対するものではないことはすぐに分かつた。

レミリアの目が、何かに恐れているようなのだ。

「ちょっと、どうしたの?」

もう一度問い合わせたところで、パチュリーは自分の思い違いに気

がついた。

なにかに不安を抱いている?

レミリアはパチュリーの問いにどう答えたらしいのか分からぬのか、手元や本棚を見たりと視線が定まつていない。もしかしたら自分がなぜ不安になつているか分からず、困惑しているのかもしない。視線が定まらないのは明確な答えを見つけられないからなのだろう。

「ちょっと聞きたいことがあるのよ」

レミリアがそう口にしたのは、パチュリーが冷め切つた紅茶を飲もうとカップに手を伸ばそうとしたときだった。

「なによ改まつて」

カップへと伸ばした手を戻し、机に肘をついて組んだ手に顎を乗せながらそう言つた。

紅魔館の主に對してこんな態度が取れるのは、パチュリーがレミリアにとつてただの友人ではなく、相談役のような立場にあるからだ。

レミリアはたまに他人には言えないような悩みを抱えることがある。しかし、主人が従者たちに情けない姿を見せるわけにはいかずひとりで抱え込むことがあるので、時々パチュリーがそれを解消してやるのだ。

「ほら話してみなさい。いまさら隠し事なんてするような仲じやないでしょ?」

「いまだに口」もつている友人に対し、パチュリーは諭すように言つてやつた。

するとレミリアは観念したかのようだ大きく溜息をついた。

「はあ、それもそうね。單刀直入に聞くけど、最近なにか変わったことはなかつた?」

突拍子もない質問だつたので面食らひながらも、口元に手を当てながら思案したが、特に思い当たる節はなかつた。

「さあ、特になにも無いわね。それにこういうことはレミアの方が

敏感なんだから、レミィがわからないことは私にも分からないわ」「そう言つと、レミリアはまた視線をパチュリーから外そうとして、だが、すぐにパチュリーの顔に視線を戻した。ひとりで考えてもどうにもならないと分かつたのだろう。

「昨日の夕方から妙な胸騒ぎを感じているの」

「胸騒ぎ?」

「ええ。私が起きたのがその時間帯だからそれ以前のことはわからないけど、その時からずっと感じているわ」

吸血鬼でありながらこんな時間に起きてきたのはそれが原因らしい。

レミリアは鼻から息を長く吐き、椅子の背もたれに身体を預けて腕を組んだ。姿勢が幼いので、ともすれば子供が威張つているように見えてしまう。

「その胸騒ぎの原因は……その様子だと見当すらつかないみたいね」

「こんなのは初めてよ。自分が何を感じているのかも分からぬに、近くで自分や他の誰かに関わるような異変が起きているかもしれない とてもじゃないけど耐えられないわ」

先ほどレミリアの表情を怯えているようだと思えたのはあながち間違いではなかつたらしい。

それにしても、ここまで落ち着きのないレミリアを見たのは初めてだ。

今も組んだ腕を指で何度も叩いていたし、眉間にしわは一向に消える気配がない。

もしかしたら自分が考えているより事態は良くないのかもしれない。

「しかたないわね」

氣だるげに言いながら立ち上がり、パチュリーは頭をぽりぽりと搔いた。

田の前で友人にこんな顔をされていたのではこれからまで落ち着か

なくなるといつものだ。

「とりあえず紅魔館の周辺を調べておくわ。だからもう少し紅魔館の主らしい顔をしなさい」

パチュリーはきょとんとした顔のレミリアに溜息交じりの笑顔を見せながらそう言つと、小悪魔を呼びつけて必要な魔道書を持ってくるように指示した。

誰だつて、困つている友人を目の前にしたら手を差し伸べずにはいられないだろ？。

「悪いわね」

「そう思うなら自分で解決してほしいものだわ」

「パチエはもう少し外に出たほうが良いと思うのだけれど」

その言葉にはさすがのパチュリーも目を見開いた。

この吸血鬼は助けを求めておきながら、友人の運動不足解消のためだと言つのか。

レミリアはにやにやといやらしい笑みを浮かべながらパチュリーの顔を見ていた。

まったく、この吸血鬼はあと何百年生きたらこの幼稚さが無くなるのだろうか。

パチュリーはレミリアの冗談に乗つてやることにした。

「ならあなたも一緒に行く？ いまは絶好の散歩日和よ？」

今度はレミリアが言葉を失い、そして、次の瞬間にほどどちらからともなく笑いあつていた。

小悪魔の「パチュリー様」と呼ぶ声が聞こえたのはそんなときだつた。

「準備も出来たし、行つてくるわ」

「ありがと」

なにをいまさらという顔をして、パチュリーは小悪魔から魔道書を受け取つて図書館を後にした。

魔理沙が目を覚ましたのは、洋館の雰囲気にぴったりの上品なソファの上だった。

昨夜は結局深夜まで実験を続けていた。想像以上に良い結果が出たので、一人して子供のようにはしゃぎながら時間を忘れて没頭してしまった末、疲れ果てた魔理沙はソファに倒れこむようにして寝てしまつたのだ。

いつの間にかかけてあつた毛布をどかして起き上ると、カーテンの開けられた窓から差し込む光に一瞬目がくらみ、皿の上に手のひらを当てた。

外の明るさからすると、目覚めることをかかはせか遅かつたかもしれない。

「……ん、いま何時だ？」

半分閉じたままの瞼を擦りながら辺りを見渡して時計を探した。

「もうすぐ10時よ」

魔理沙が目当ての時計を見つけるのと同時に聞こえた声の主は、綺麗な装飾の施されたトレイに一人分の紅茶を乗せて運んできているところだった。

ソファに座つていながらでも紅茶の甘い香りが伝わってくる。それは寝ぼけ眼だった魔理沙を覚醒させるには十分だった。

「ふああ。良い匂いだな」

「ダージリンよ。ほら、女の子なんだからもう少し身だしなみに気をつかいなさいよ」

あぐび混じりで言つた魔理沙に対して、アリスはトレイを机の上に置いてから用意してあつたであろう鏡と櫛を差し出してきた。魔理沙はそれを受け取りはしたが、鏡は見ないで適当に髪を梳く程度にしておいた。これから誰かに会うわけでもないし、寝癖なんて家に帰つてからゆっくり直せばいい。なにより、紅茶が冷めてしまう

ではないか。

そんな魔理沙の様子を椅子に座つて紅茶を飲みながら眺めていたアリスは、呆れたようにうなだれていた。魔理沙は「まあまあ」と言いながら空いている椅子に座つた。

たしかにアリスは普段から身だしなみには気をつけている節がある。もし初めて会つたときに貴族のお嬢様ですなどと言われば信じてしまうだろう。いや、今朝も魔理沙より先に起きて紅茶まで準備しているあたり、貴族のお嬢様というより貴族に仕える使用人のほうがしつくりくるかもしだれない。

とにかく友人と二人きりの時ぐらいは楽にしていいと思うのだ。そもそもそんなに身だしなみに気をつかつたところで、一体何の得があるというのだろうか。別に見せる相手がいるわけでもないだろうにまさか、アリスには相手がいるのだろうか。もしかして知らないうちに人里で……

頭の中であれこれと妄想を膨らませながら無意識に紅茶を飲んで、魔理沙はようやく我に返つた。

「……おいしい」

「でしょ？ 昨日の実験がうまくいったから、お祝いとまでは言わないけどちょっと奮発してとつておきの……ちょっと、聞いてるの？」

「え、ああ……うん」

魔理沙が心ここにあらずだつたのはアリスの説明を聞くのが面倒だつたからではない。楽しそうに笑いながら話しているアリスを見ていたら、先ほどの自分が馬鹿らしく思えてしまつたからだ。

カップの中を覗き込んで、魔理沙は自嘲気味に笑つた。

薄いオレンジ色の紅茶に映る顔の、なんと情けないことか。

「魔理沙？」

覗き込むようにしてこちらの顔色を窺つてきたアリスに、魔理沙は「なんでもない」と言って、紅茶の残りを飲み干した。口の中にいっぱいに紅茶の風味が広がり、少しむせてしまつた。アリスはまた

もや呆れてうなだれてしまつた。

魔理沙はけほけほと咳き込みながら、訝しげにこちらを見てくるアリスから目を逸らした。

声には出していないが、あきらかに魔理沙の挙動を不審に思つているのが顔を見なくても雰囲気だけでわかつた。

「き、気にすんな！ ところで宴会の話はどうなつたんだ？」

いまの空氣に耐えられず無理に話題を変えてみたのだが、これが妙なことになつてしまつた。

先ほどまで魔理沙の顔を訝しげに見ていたアリスの目が一瞬だが眉根を寄せたように見えたと思ったら、次の瞬間には人形のように無表情な少女がそこにいた。

突然のことでの魔理沙が困惑していると、アリスは何事も無かつたかのように、だが、取り繕つたのがわかり過ぎるほどにわかる不自然な笑みを浮かべた。

「ええ、順調に進んでるわよ」

昨夜のアリスと紫のやり取りを思い出した。

あのとき一人は魔法を使って魔理沙に声が聞こえないようにしていた。どうしてそんなことをしたのかはわからないが、今のアリスの態度を見ればなにか知られてはならない、それも魔理沙にとつて好ましくない話だったのは歴然である。そもそも宴会の話だったのかすら怪しい。アリスと紫が一緒いたこと自体珍しいというのに、普段は誘われる側のアリスが宴会の企画者側に立つなど初めてではないだろうか。

何を隠しているのか気になるが、もう少し様子を見てから訊くことにしようと思つて、魔理沙はできるだけ動搖を隠しながら話を続けた。

「……そうか、そういえば宴会なんて久しぶりだな」

魔理沙自身もそうなのだが、周りの友人たちが揃つて宴会好きなのでことあるごとに宴会を開いており、今の時期だと雪が降るたびに皆で集まつて雪見酒に興じるのだ。

だが最近は肝心の雪が降つていないので、一ヶ月ほど宴会は開かれていない。もつとも、一ヶ月で久しぶりだと感じるのは魔理沙だけの感覚なのだろうが。

「アリス？」

魔理沙は空だというのを忘れてカップを持ち上げようとしてしまい、一気に飲むんじやなかたと後悔しながら顔を上げて、ようやくアリスの異変に気づいた。

アリスは魔理沙の呼びかけにも応えず、愕然とした表情のまま、ぜんまいの切れた人形のようにぴたりと動かなくなってしまっていたのだ。

これにはさすがの魔理沙も無視できなかつた。

「おい、どうしたんだよ！ おまえさつきからおかしいぞ？」

魔理沙がそう言つと、アリスは小さく「あつ」と言つてから顔を手で覆いながら背けた。

その横顔からは、汗が頬を伝つて落ちていくのと眉間に見たことも無いほどしわを寄せているのが見て取れた。いかなる時でも冷静さを崩さないアリスがここまで平静を欠くなど、もはやただ事ではない。

ただ、今の会話の中のどこにアリスがこうなる要素があつたとうのか。

昨晩の紫とのやり取りに始まり、今のアリスの反応はすでに魔理沙ではどうしようもないほどの困惑をもたらしていた。

「今日は……」

先に沈黙を破つたのはアリスだつた。

「今日は、もう帰つてくれないかしら」

だが、発せられた言葉は、魔理沙の意とは異なるものだつた。

顔を背けたままのアリスの横顔から見える目に魔理沙が映つていないのは明白だつた。

もう何を訊いても無駄だらう。

それは今までの経験だとか、アリスの性格を考えてのものでは

なく、直感がそう告げているのだ。

「そうだな」

椅子から立ち上がり、実験の資料を取りに実験部屋へと向かった。その際アリスのほうを振り返り見たのだが、やはり身動きひとつせずどこかを見つめたままだつた。いや、むしろ視界にはなにも映つていないのでしれない。

魔理沙が茸を入れていた袋は実験部屋の隅に置かれていた。綺麗に畳んであるあたり、魔理沙がソファに倒れこんだ後にアリスがやつてくれたのだろう。そして机の上に丁寧に置かれていた実験の資料をその袋に詰め込んだ。以前のアリスが見たらあまりの粗雑さにまた溜息を漏らしていただろう。

「じゃあ帰るぜ」

そう言つたのは、玄関の扉の隣に立てかけてあつた簞を取りながらだつた。

簞の柄に帽子とマフラーがかけてあつたのも、魔理沙は今に至るまで気づかなかつた。

「なんだよ、くそ」

いつも魔理沙の知らぬところで気を配つてくれていたというのに、自分はそれに気づかず、あまつさえアリスの様子がおかしいというのになにも出来ずに帰るしかないといつ事實に、魔理沙は己の無力さを罵つた。

いつまでもここに居ても仕方ないと諦めてドアノブに手をかけたところで、魔理沙は服の裾を引っ張られたので振り返ると、そこには俯きながら立つアリスがいた。

「どうし」

「た」と言えなかつた。

アリスは黙つたまま魔理沙を抱きしめ、震えながら長く息を吐いた。魔理沙はアリスより背が低いので、ちょうどアリスの首に顔があたる形になる。そのためアリスがどんな顔をしているのか見えないが、身体がかすかに震え、ときどき肩が痙攣したように動いてい

る」ことからアリスが泣いていることはすぐにわかった。

「「ごめんなさい」

懺悔するかのような囁きに、魔理沙はなにも言えずただアリスを抱き返すことしか出来なかつた。

アリスに何があつたのかはわからない。それでもアリスをこのまま一人にすることなど、出来るはずがなかつた。気の利いたことでも言えればいいのだが、魔理沙は自分の語彙の無さを理解しているので、下手なことを言うよりもアリスが泣き止むのを待つことにした。

魔理沙の肩に回されたアリスの腕が解かれたのは、身体の震えがおさまつてからだつた。アリスはそのまま魔理沙の肩を両手でわざかに押すように身体を離すと、涙ぐんだ目で魔理沙の目を見つめて消え入りそうな声でもう一度「「ごめんなさい」」と言つた。ただし、それが言葉通りの意味でないことぐらい魔理沙にだつてわかつた。アリスは言外で「ありがとう」と言つたのだ。

目元にうつすらと涙を湛えながら、アリスは母親が子供に向けるような優しい笑顔を向けてきた。

その笑顔を見て魔理沙は思わず頬を赤らめながらも、突然立場が逆転したような気がして少し複雑な気分になつた。

「落ち着いたか？」

その問いに、アリスは小さく頷くことで答えにした。

「で、いきなりどうしたんだよ」

「それは……」

この問いには顔を背けて答えなかつた。

これはいくら訊いても無駄だな、と判断した魔理沙は、諦めたようすに肩をすくめてから再びドアノブに手をかけた。はつとしたように顔を上げたアリスに、笑顔で「また来るぜ」とだけ告げて扉を開けた。

昼前とはいえたの空気は冷たく、飛んでいるということもあって頬に刺すような痛みが走る。

マフラーを口元まで引き上げる。幾分かは寒さを誤魔化せるが、それでも寒いものは寒い。

しかし、これぐらいの寒さのほうが考え方をする上ではちょうど良いのかもしない。

「……」

魔理沙は寒さに身体を震わせながら、アリスの様子がおかしかったことについて考えていた。

まず、昨晩のアリスと紫のやり取りだ。

あの一人が一緒にいることも珍しいが、宴会の企画をしていたなどそれ以上に珍しい。いや、これは完全に嘘だと判断していいだろ。そもそも何のきつかけもなしに突然そんなことを企画するような一人ではないし、それをわざわざ魔法を使ってまで隠す必要はないはずだ。もし、他の者に聞かれたくなかったのだとしても、もつとうまい隠し方があつたはずだ。

次にアリスの異様な態度の変化について。

紫が去つてからというもの、魔理沙の些細な発言に過剰な反応を見せていた。しかも他愛も無い会話の中でだ。実験中はそれ以外の会話がほとんど無かつたため気づかなかつたが、今朝の会話でのアリスの反応はあまりに奇妙なものだつた。特に魔理沙の「宴会なんて久しぶりだ」という発言に対するそれはあまりに異常だった。たしかに一ヶ月で久しぶりというのは大げさだったかもしれないが、なにもあそこまで

「までよ」

もし、魔理沙の発言そのものに驚いたのではないとしたら?

久しぶり つまり、時間に関する何かがあつたのでは?

紫との会話は、それに関係することなのでは?

どれも仮定の域を出ないが、それでもあの一人が何か企んでいるということは確信していた。それは今までにいくつもの異変を解決してきた魔理沙の勘がそう言っているのだ。

とは言え、それが何なのかを確かめるにはあまりに情報が少なすぎる。

家に戻つたら実験結果を魔道書にまとめようと思っていたのだが、少し寄り道をすることにした。

情報を集めるなら、ぴったりの人物がいる。

「まずはあいつに」

途中で言葉を切つたのは、予想外の邪魔者が現れたからだ。魔理沙は左手で筹を支えながら、右手で腹部を押さえた。

「腹、減つた……」

ぐう、と情けない音がする。

そういうえば、昨晩から実験に集中しすぎて何も食べていないではないか。

情報収集は、腹ごしらえをしてからでも遅くないだろ。魔理沙はまっすぐに自宅へ向かうことにした。

冬には独特的の静けさがある。木々は葉を散らし、虫は鳴くのを止め、動物は眠りにつき、人間は家に閉じこもる。まるで世界から生き物がいなくなってしまったかのようだ。そんな静けさだ。そしてそれは博靈神社の物悲しさを際立たせていた。

今日も、参拝客が来る気配はまったくない。

しかし、どんなに参拝客が来なくとも、巫女としての仕事はこなさなければならない。

靈夢は寒空の下、身体を冷たい風に震わせながら竹箒で境内に散らばる落ち葉をかき集めていた。時期が時期なので落ち葉の量は多く、集めた落ち葉の山はかなりのものになつた。

本当は早朝からはじめなければならないのだが、冬の寒さに負けて布団からどうにでも出しができなかつたのだ。ただ、空腹を睡眠で紛らわしたいという気持ちがなかつたのかと訊かれれば、答えは否だらう。

まだ風に吹かれてかさかさと舞う落ち葉がいくつか見えるが、すべてを集めるにはこの境内はあまりに寒く、そして、これ以上の労働は耐え難い苦痛でしかなかつた。

落ち葉の山から視線を空に移し、深くため息をついた。それは冬の空気の侘しさに対するものではない。空を流れる雲の形が変わったびに、いろんな食べ物に見えてしまつ自分が情けないのだ。もう、余裕なんてどこにもありはしなかつた。

落ち葉の山の側でしゃがみ、用意してあつたマッチでそれに火をつける。火は徐々に広がり、ぱちぱちと音を立てながら燃え上がり、一筋の煙が上空へと伸びていった。

靈夢は火のついた落ち葉の山に手をかざして暖を取りながら、煙の筋を目で追いかけるようにもつ一度空を見て、誰に聞かせるわけでもなく呟いた。

「宴会、やううかしら」

紫の提案に賛同するといつのは甚だ不本意ではあるが、そもそも言つていられない。なにしろ今朝ついに残りわずかだった食料を食べつくしてしまったのだ。ここにまで食料を調達しないと、それこそ命に関わる。

ただ、自分から動くだけの気力など残つてゐるはずもなく、靈夢は参加者の募集を別の人物に任せることにした。

その人物　伊吹萃香は、自身の能力によつて宴会の定期開催を定着化させようとしたことがあるほど酒好きで、宴会の話をすればいくらでも手伝ってくれるはずだ。

『密と疎を操る程度の能力』と呼ばれる萃香のそれは、物質から精神に至るまであらゆるものを萃めたり疎めたりすることができ、以前萃香が起こした異変も、幻想郷中の人や妖怪の思いを萃めたことによるものだった。

靈夢は神聖な巫女とは思えないほど儚だるげに立ち上がると、誰もいない空に向かつて、口の横に手を当てて萃香を呼ぶのに最も適した言葉を叫んだ。

「萃香ーうまい酒が飲めるわよー」

数秒そのままでいると、背後に気配を感じたので振り返る。すると、今まで何もなかつた空間に霧のよつたものが集まつて小さな雲のようになると、それは瞬く間に少女の形になつて靈夢に飛びついてき、ぐるぐると回りだした。

「酒ー！」

まともな食事が取れていない靈夢に、この無邪気な笑顔で戯れてくる少女を支えるだけの体力などあるはずもなく、なんとか少女を引き剥がして地面に立たせてると膝に手を当てて肩で息をした。まさかこれほどとは靈夢も予想だにしておりず、大きなショックを受けていた。

少女は「どうした?」と言わんばかりの表情でこちらの顔を覗き込んでくるが、靈夢は一瞥もくれてやることなく呼吸を整えた。

「……萃香、お願ひだから今の私に過度の運動をさせないで」

萃香と呼ばれた少女は、今の言葉が意味するところを靈夢のやつれた類と、ぐう、と鳴った腹の音から判断したのだろう。今までの無垢な子供のような顔が、哀れみのそれに変わった。その変化は雰囲気だけでも十分伝わってきたが、靈夢は一顧だにしなかった。見れば、余計に心の傷を抉ることになると容易に想像できたからだ。なんとか喋れるまでに回復すると、靈夢は背筋を伸ばして萃香の顔を見た。萃香は靈夢よりもかなり小さく、頭のてっぺんが靈夢のへそのあたりにあるので今の位置では若干話しづらいが、今しゃがむと立っているのも辛いのかと誤解されそうなので、そのまま喋ることにした。

「あんたに頼みたいことがあるんだけど」

「酒はー？」

どうやら友人からの頼みことより酒のほうが重要らしい。

萃香のことを見た目が少女であるということしか知らないものがこの会話を聞けば間違いなく誤解するだろうが、実際に萃香を見ればその誤解も解けるだろう。なぜなら萃香の頭の両側には、体格とは不釣合いなほど大きな角が生えているのだから。

そう。萃香は人間ではなく、妖怪なのだ。

しかもそちらの木つ端妖怪など足元にも及ばぬ力を持ち、妖怪の中でも最強と謳われる種族、鬼なのだ。

鬼はその強大な力で人間だけでなく妖怪からも畏怖の対象とされ、妖怪の山と呼ばれる場所では天狗や河童たちを支配していた幻想郷でもトップクラスの力を持つ種族なのだが、博靈大結界が創造されるところには幻想郷から姿を消していたため、靈夢は萃香に出会うまで鬼という存在を知らなかつた。だが話を聞いてみると、鬼たちは地底に移住していたらしく、萃香もその移住した鬼の一人で、最近ではこうして頻繁に地上に出てきているそうだ。

靈夢はわざとらしい咳払いをしてから萃香を見た。ただし、こつちの話を最後まで聞け、という明確な意思を視線に乗せて。

「ちから」の意味が伝わったのか、萃香は叱られた子供のよつて肩を落とした。

「さつきも言つたけど、頼みたいことがあるのよ。お酒はそのあと「頼み」と、どんな？」

萃香が首を傾げると、肩にかかつて小麦色の髪の毛の束がはらりと落ちる。見た目が年端もいかぬ少女の姿のせいで色気はあるで感じないが、腰のあたりまで伸びた艶やかな髪は同じ女としてうらやましく思う。

「あのね」

靈夢は萃香に宴会の参加者を集める手伝いを頼もつとして、やはり考え直すことにした。

萃香が異変を起こしたとき、靈夢はそれを食い止めるために萃香と戦い、一応は解決という結末を迎えた。にも拘らず、自分が同じことをするといつのはどうなのだろう。靈夢の知り合いでそれを非難するものはいないだろうが、博靈の巫女としての体裁を保たねばならないのも、また事実なのだ。

こつまでも黙つたままの靈夢を不思議そうに見つめる萃香を他所に、靈夢は別の案を考えることにした。

とりあえず、別の人物に頼むのが妥当だろう。たとえば、迅速かつ広範囲に情報を伝えてくれるような……

「あ」

いる。

まさにぴつたりの人物が。

突然俯いて口に手を当てながら黙りこくつてしまつたかと思えばいきなり顔を上げた靈夢を、萃香は口をぽかんと開けたまま眺めているだけだった。

それに靈夢が気づいたのは、顎を上げてすぐだった。

なにしろその時の萃香の顔は、1000年以上生きた大妖怪とは思えぬほど間抜けな顔をしていたのだから。

ついで元がほころびそうになるのを堪えることはできたが、背を

屈めながら話しかけてしまったのはほとんどの意識のついただつた。

「ねえ、文を呼んでくれない？」

「文を？ 別にいいけど」

言つて、萃香は靈夢に背を向けてから空に両手をかざした。能力を使うのにそういう動作が必要だという話は聞いたことがないので、萃香が雰囲気を出すためにやつてているだけなのだろう。

「よし、これでしばらくすれば来ると思つよ」

腰に手を当てて貧相な胸を張つて自慢げな笑みを浮かべる萃香を見て、つい頭を撫でて褒めてやりたくなるが、さすがにそれは子ども扱いをされたと怒るかもしれないのに、やめておいた。

萃香の能力は何度も見たことがあるので、件の人物はあと数分もしないうちに飛んでくるだらう。

話も終わつて気が抜けたのか急に寒さを思い出して身体が震えたので、靈夢は振り向いてしゃがむと、もう一度焚き火で暖を取ることにした。

萃香が背中にのしかかつて何度も「酒はー？」と訊いてくるのは少しつつとろしく感じたが、これはこれで暖かいので放つてくる。ただ、これなら子ども扱いしてもそんなに怒られなかつたかもしれないな、と思つた。

射命丸文

彼女は妖怪の山に住む鳥天狗の一人で、普段は新聞

記者として幻想郷中を飛び回つてネタを追い求めており、文々。新聞という新聞を発行しては定期購読してくれないかと勧誘してくる。しかし、書いてあることは大して面白みもないことばかりなので、定期購読者が増えることはまったくなく、日々そのことを嘆いていようだつた。

だが、それは靈夢にとつてうつてつけだつた。

久しぶりの宴会ともなれば、参加者は皆羽目を外して新聞のネタ

になるようなことをしてくれるはず。それを餌に文に号外を出してもらえるように頼むのだ。異変の途絶えてしまった今なら、きっとうまく釣れるはずだ。

「そんなの私に頼めばいいじゃん」とは萃香の言。

博靈の巫女としての話をしてやつてもいいのだが、おそらくつまらないことにこだわる奴と思われて終わりだと思ったので、適当な言い訳をして誤魔化しておいた。

ちなみに、しょっちゅう一緒に酒を飲もうと言つてくるくせに、なぜいままで能力を使うなりして宴会を開こうとしなかつたのかと訊いたら、地底で他の鬼たちと飲んでいたからだそうだ。実際に萃香らしい答えだつた。

「じゃあよろしくね」

宴会を開くにあたつて、萃香にはある役割を担つてもらうことになった。うまい酒には、うまい肴が必要になる。萃香にはその肴を作つてもらつのだ。

萃香と並んで焚き火に当たつていると、遠くの空に「ひらへ向かつて飛んでくる人影が見えた。

「来たわね」

立ち上がり、人影に向かつて手を振つた。それに気づいたのか、人影は手を振り返す代わりに境内へと降り立つた。

「おはよう、文」

冬だというのにふとももが丸見えの黒いミニスカートに半袖の白いシャツ、首には秋の装いを切り抜いたかのような色鮮やかなもみじの刺繡が施されたマフラーを巻き、これまた真っ赤に紅葉したもみじのようないい一本歯の下駄を履いているという、人間からしたら考えられないような服装に、靈夢はさらに寒さが厳しくなつたような錯覚に見舞われた。

靈夢が挨拶すると、文も笑顔で挨拶を返してきた。

「おはようござります靈夢さん……と、萃香さん」

萃香の名前を言つときには笑顔が引きつり、声が若干畏まつた風になつたのは、まだ二人の間に蟠り^{わだかま}が残つてゐるからだらう。鬼がまだ幻想郷にいた頃は、鬼と天狗は完全な上下関係にあつたので、いまだ文は萃香に頭が上がらないのだ。鬼たちがまた妖怪の山に戻つてくれば、再び鬼を頂点とする社会に戻つてしまふので、文としてはできる」となら鬼が幻想郷に戻つてきてほしくないのだ。もちろんそんなことを直接言えるわけもなく、今のように萎縮した態度になつてしまふのだ。萃香もそれを理解しているようで、「ん」と小さく言つて手を上げるだけだった。靈夢が生まれるはるか昔より続く蟠りというのは、そう簡単に無くなるものではない。

文と萃香の間に流れる空氣に耐えかね、靈夢は一人の間に割つて入るような形で話を切り出した。なにより、こんな空氣にするために文を呼んだわけではないし、

「こきなりで悪いんだけど、文に頼みたいことがあるのよ

「……なんですか？」

滅多に使うことのない営業用の笑みを顔に貼り付けて言つと、文は隠すことなく嫌そうな顔をしてきた。

さすがに貼り付けた笑顔が引きつてしまつたが、靈夢はさうこ話を続けた。

「文に号外を出してもらいたいんだけど

「なにか特ダネでも！？」

靈夢が言つ切ると同時に、文はポケットから手帳を取り出して表紙に引っ掛けたボールペンを取つていた。

田にも留まらぬ速さとはこのことか。

さつきまでの態度はどこへやら。すでに文の顔は新聞記者のそれになつていた。

あまりの速さと変貌振りに、靈夢は驚くのを通り越して呆れてしまつた。

「いや、特ダネではないわね」

そう言つと、文は心底がつかりして「そうですか」と嘆息して手

帳をポケットにしまつた。

どうやら余程新聞のネタがなくて困つてゐるらしい。

自分では気づいていないが、靈夢は営業用ではなく本物の笑顔に変わつていた。

そして落胆する文に、芝居がかつた言い方でいつの言つた。
「でも、私に協力してくれたらネタになることに出来えるかもしねいわよ？」

靈夢は、文の耳がぴくりと動いたのを見逃さなかつた。

魚が餌に食いついた。

ただ、釣り針が引っかかるにはまだ浅い。

こちらに顔を向けてきた文に、すかさず次の言葉を投げかけた。
「実は今日にでも宴会を開こうかなと思つてゐるよ」

「宴会ですか」

聞き返してはきたものの、それは無意識に言つただけなのかもしない。文の田は靈夢ではなく、靈夢の言葉の真意に向けられていた。

十分に興味を引くことができたらしく。

「じしまできたらこいつのものだつた

「やつ。最近冬なのにまったく雪が降つてないでしょ？ そこで萃香に頼んで雪を降らしてもらつことにしたのよ。ひさしひりの雪見酒できっとみんな羽田を外して面白ことをしてくれるはずよ」

萃香に作つてもらう肴とは、このことだ。

冬になればいつも嫌といつほどの雪が、今年はまだ降つていない。宴会を開こうにも、ただ寒い場所に集まるだけでは盛り上がりに欠けるといつものだ。そこで萃香の能力を使って雪雲をこの博靈神社の上空に集めてもらい、一年ぶりの雪見酒を楽しもうとすることにしたのだ。それに靈夢の知り合いには幸か不幸か酒癖の悪い連中が多いので、適当に煽れば新聞のネタになりそうなことのひとつやふたつはやらかしてくれるだろ？

靈夢の話をふむふむと頷きながら聞いていた文に、靈夢はやうに

詳しい内容と号外に書いてほしいことを説明しようと/orして、得心がいつたように少しだけ深く頷いた文が言つた「つまり」という言葉に遮られた。

魚が、釣り針をしっかりと咥えこんだ瞬間だつた。

「つまり、私に号外を出させて参加者と、それに食材も全部集めてしまおうといふんですね？ そして余った食材を全部もらおうと。私は皆さんに酒に酔つて面白いことをすればそれを記事にする。たとえ記事なるようなネタがなくても、私は号外の報酬として何も持つてこなしても料理とお酒にありつける、と。」

これから言おうとしていたこと、黙つてこなうと思っていたこと、それらをすべて言い当てられ、靈夢は萃香ほどではないにしろ口を開けたまま呆然としてしまつた。

どうやら文は優秀な新聞記者だつたらしい。

黙つたまま感心していた靈夢は、文の「そういうことですよね？」という声で我に返つた。呆然としたといつてもほんの数瞬のことだと思つ。

「……ええ、そうよ」

ややつつかえ気味に言つと、文はなぜかはにかみながら笑い、頬をぱりぱりと搔いてこんなことを言つてきた。

「いやー、実は私もひさしひさしひと萃香さんと宴会でもしたいなと思つてたんですよ」

たしかに雪見酒は一年ぶりだが、宴会自体は一ヶ月前にやつているのに何故久しひりなのか。

妖怪というのは1000年以上生きるものがほとんどで、田の前で「ははは」と笑つている文も、後ろで焚き火に手をかざしている萃香もそうだ。そんな長命の妖怪たちからしたら、それこそ、一ヶ月など瞬きにも等しい時間だらう。だから「またか」と言われるならわかるが、「ひさしひり」と言われるのには……いや、こつも考えられる。人間の寿命というのは妖怪に比べてあまりにも短い。だから人間と付き合う妖怪たちは、一緒にいられる短い時間を人間以上

に大切にしているのかもしない。だからこそ「ひさしぶり」なのだろう。ほんの一瞬でさえ、妖怪の中では何倍もの思い出として蓄積されているのかかもしれない。

この際直接訊いてみようか。

そんなちょっとした好奇心は、靈夢の視界に入った人影にかき消された。

「……魔理沙？」

文の背後、神社を囲む森の上を飛んでこちらへと向かってくるのは、靈夢の旧友、魔理沙だった。

萃香に魔理沙を呼ぶように頼んだ覚えはないが、そもそも普段から用事がなくても来るのだから気にする必要もないだろう。

靈夢の視線に気づいたのか文が後ろを振り向き、それに釣られて萃香も立ち上がって二人の視線の先に目を向けた。

魔理沙は文の田の前で箒から飛び降りるように着地した。魔理沙のトレーデマークとも言えるつばの広い帽子を風で飛ばされないように手で押させていたが、何の抵抗もないスカートは着地の際に大きく膨らみ、素足が見えていた。女なら帽子よりスカートを気にするべきだと思うのだが、それを魔理沙に言つたところで無駄だとわかつているので、靈夢は無視することにした。

「何しにきたのよ

「あんまりな言い方だな」

魔理沙はわざとらしく肩をすくめてそう言つと、箒を肩に立てかけるように持ち、文と萃香を流すように見ながら立っている右手を上げた。眞面目に挨拶をするようなやつでもないし、今更そんなことをするような仲でもないので靈夢はわざわざ挨拶を返すことなどしなかった。萃香も魔理沙同様手を上げるだけだったが、文はしっかりと「おはよ「づ」やります」と言つた。普段は飄々としたところがあるように見える文だが、根は眞面目なのだろう。

「それに今日は靈夢に用があつてきたわけじゃないぜ

そう言つと、魔理沙は文に視線を移した。

どうやら文を探してここに来たらし。

文も魔理沙の視線でそれに気づいたらしく、姿勢を正してから手帳の入っているスカートのポケットに手を伸ばし、だが、すぐに下ろしてしまった。文の少し後ろに立っていたので、その様子が視界の隅に移っていた。職業病とでも言つたのだろうか。その動作はすでに癖になっているようだ。

「私に何か用ですか？」

「おう。実はおまえに頼みたいことがあるんだよ」

「魔理沙さんもですか」

文の言葉に魔理沙は、お、という顔をして靈夢のことを見た。萃香ではなく真っ先にこちらを見たあたり、なかなかいい勘をしている。もつとも、萃香が文に頼みごとをするなどありえないという考え方からかも知れないが。

「なんだ、靈夢も文に用事があったのか」

「宴会でも開こうと思つてね。そのことを局外でみんなに知らせてもらおうと」

そこで言葉を切つたのは、魔理沙が眉根にしわを寄せていたからだ。

変なことでも言つただろうか。

そんなことを思つていると、魔理沙のほうから口を開いた。

だが、待つていたのは予想だにしない質問だつた。

「宴会つて、おまえ一人で企画したのか？」

「は？」

意味がわからない。なぜそんなことを訊いてくるのか。

靈夢は魔理沙以上に眉根にしわを寄せながらこう答えた。

「まあ、そう言えなくもないわね。もとは紫が言い出したことなんだけど」

靈夢が言い切るや否や、魔理沙は「紫が！？」と叫んだ。

あまりのことに靈夢が言葉を失つていると、魔理沙は叫んでしまつたことを謝るよつに帽子をぐつとさげて顔を隠してしまつた。

只ならぬ雰囲気に、文と顔を見合わせてしまった。

様子がおかしいというより、魔理沙は何かを知っているという風だった。

「ちょっと魔理沙、どうしたのよ」

靈夢が声をかけると、魔理沙はようやく顔を上げた。が、その顔はさつきまでとはまるで別人のようだった。

「靈夢、紫はなんて言つてた？」

相変わらず要領を得ない質問に辟易しながらも、魔理沙の質問に答えることにした。きっと、答えなければ何度も訊いてくるだろう。

靈夢は顎に手を当てながら昨日の紫とのやり取りを思い出した。
「えつと……私がお腹が減つたって言つてたら突然現れてひさしぶりに宴会でもしないか、て言つてきたのよ。それで」
靈夢が再び言葉を切る羽田になつたのは、魔理沙が愕然と目を見開いていたからだ。

間違いなく、魔理沙は何かを隠している。

それを理解するのと、魔理沙が口を開くのはほぼ同時だった。

「昨日、アリスの家に紫が来てたんだ。でもわざわざ魔法で声が聞こえないようにして、一人だけで宴会を企画してたから聞かれたくなかったって……」

隠し事が親にばれて叱られている子供のような顔で吐露した内容に、靈夢は紫に対する不信感を抱いていた。

アリスと企画しているなどという話は聞いていないし、そもそも二人だけで企画しているというのなら、なぜ自分に宴会の話を持ちかけたのだろうか。

魔理沙が何か知っている風だと思った謎が、ようやくわかつた気がした。

あれは、何度も異変を解決してきた経験からくる第六感ともいってき勘が働いたからだ。

魔理沙は新たな異変の予兆を感じ取っているはずだ。だから「

して紫との会話を記してきたのだ。文に用事があるところの、情報集のためだというなら合点がいく。文ほど幻想郷の情勢に詳しいものなどいないだろ？

「それで、今朝もアリスとその話をしたんだけど、私がひさしふりだつて言つたらアリスのやつ、『えらく驚いてさ。あの時のアリスは絶対に何か隠してると思うんだ。それなのに一緒に計画してる紫は靈夢にひさしふりだつて言つたんだろ？絶対おかしいぜ…』

「たしかにそうね」

宴会については紫がひさしふりだからと言つ出したの、紫と一緒に企画しているらしいアリスはまるでそう思つていらないらしい。しかも魔理沙のひさしふりという発言に対し、アリスは魔理沙が不審がるほど驚いていたという。アリスが何かを隠しているという魔理沙の意見には賛同するが、それとは別に、紫とアリスとの間に妙な食い違いがある気がするのだ。

しかし、これだけの情報でそれらすべての謎を解くのは難しい。もつと別の意見が欲しい。

靈夢は用があると言われたのに、ほつたらかしさにされて少し不機嫌そうに話を聞いていた文に水を向けた。文はのそり、という音が聞こえてきそうなほどゆつくりとこちらを見た。

「文はどう思う？？」

その問いに文はこれまたゆつくりと口を開じて、それからふむ、と頷いてから目を開いた。

文にはいくつか癖があるのかもしれない。

「もしかして、アリスさんは魔理沙さんが宴会をひさしふりだと思つていることに驚いたのではなく、そつ思つてしまつていることに驚いたのでは？」

似ているようで、まったく違う。

前者の場合、そこにはあるのはお互いの価値観の相違だけだ。『

あなたそう思つてるかもしないけど、私はこいつ思つてないわ』

そんな意見の不一致による驚きだ。だが後者の場合は少し違う。

『そんな考え方間違っている。おかしい。なぜそう思つてしまつてゐるの?』　『どうよ、はじめから相手を否定した考え方だ。これを文の考察に当てはめると、アリスは魔理沙が宴会をひさしぶりだと感じるなどありえないと信じていた、ということになる。つまり、前もつて聞かされていていたということになるのだ。『これから開催される宴会はひさしぶりのものではない』と。だからアリスは魔理沙の発言に驚いた。与えられた情報と違つていていたから。信じていた情報が間違つていた。違つてはならないものが違つていたから。

そしてその情報の発信源は、間違いなく紫だ。

靈夢が紫とアリスの間に感じた食い違いは「」のことかも知れない。けれど、そうなると気になることがある。

「文の言いたい」とはわかつたわ。それに私も「その考え方」には同意する。けどそうなると、紫はわざわざ私が宴会を開くことをひそしげりだと思つていないとアリスに伝えていたといつてになるじゃない?」

紫がそんなことをアリスに伝える理由がわからない。そんなことに何の意味があるのか。

靈夢の疑問に、文は顔を背けるように目を開じた。

人の感情や言動の裏を読み取ることを得意とする文でも、この問い合わせには答えられないらしい。

「これ以上はさっぱりだな」
「当然だ。あまりは不口觸りだる

魔理沙が簾に体重をかけながらおおげさにため息をついた。

たしかにこれ以上のことを推測するには情報が少なすぎる。紫を問い合わせれば済む話かもしれないが、おそらくまともに相手にされることなく逃げられるのが落ちだらう。それにもし異変でなかつたとしたら後が怖い。

もっと情報がいる。

それは魔理沙がここに来た理由であり、そして魔理沙の顔を見る

に、そのことを言いたそうしていったのでその役割は譲ることにした。「というわけで文、おまえにはこのことについての情報を集めて欲しいんだ。頼めるか?」

文は靈夢のほうをちらりと見た。

文としては仕事を請け負つた以上、優先順位といつものがある。だから靈夢の許可が欲しいのだ。

靈夢としても新たな異変の可能性があるなら、文に情報を集めてもらうのが最適だと思うし、号外を配つてもらつた手間にできることなのでこちらとしても困ることは何もない。

「私からも頼むわ」

「わかりました」

文は気持ちのいい返事とともに一際大きく頷いた。

「とりあえずここであつたことは黙つてた方がいいな」

それにはさつきからずっと黙つたままだつた萃香も含め、その場の全員が同意した。

文と同様幻想郷中を監視してゐる紫にばれぬように情報を集めるなら、できる限り秘密裏に行わなければならない。

「さて、では私は号外を作りに一旦家に帰りますね」

各々が意見を言い尽くしたのを確認してから、文はそう言って一歩下がつて飛び上がつた。直前に萃香への会釈も忘れていなかつた。自宅へと飛んでいく文を見送つてから、地面に置いたままの簞を持ち上げた。焚き火にしていた落ち葉の山はほとんど燃え尽きていた。

「あんたははどうするの?」

靈夢は振り向きながら訊くと、魔理沙はすでに簞に跨つていた。

「私も帰るよ。実はまだ飯を食つてないんだ」

今まで話に集中していく忘れていたのに、今になつて靈夢は自分も腹を空かせているのを思い出して腹を押さえた。ぐづ、と音が鳴り、つい魔理沙と萃香のほうを見てしまつた。一人から気づいていないぞ、という雰囲気がひしひしと伝わってきたのでこつちも無

視することにしたが、それでも空しさが消えることはなかつた。

「私もちよつと用事ができた」

ずっと黙つていた萃香が立ち上がると、突然そんなことを言つて身体を霧状にして消えてしまつた。

萃香の能力は自身の存在を疎めることによつて霧のようになることもでき、境内に現れたときもその状態から存在を萃めて人の形に戻つたのだ。

「あいつどうしたのかしら」

文が来てからというもののどこか様子がおかしかつたが、文と何かあつたのだろうか。鬼と天狗の間には靈夢が知らないような問題が他にもあるのかもしない。

首を傾げてそんなことを考へていると、ぶわつと風が吹いて落ち葉の燃えカスが舞つたので思わず手で顔の前に壁を作つた。

指の隙間から覗くと、左手で箒を持ってふわふわと浮きながら、右手を顔の前で立てて謝る魔理沙の姿が見えた。

「ちょっと、もっと静かに飛びなさいよ！」

靈夢が怒鳴りつけると、魔理沙ははいはいと言いたげな顔で手をひらひらとさせた。

箒から引き摺り下ろしてやろうつと思つたが、どうせ魔理沙が逃げ回るだけで体力の無駄遣いになると判断してやめた。

「じゃあ私は帰るぜ！」

魔理沙はそう言つて逃げるよつに飛び去つていつた。そのときの風でまた少し燃えカスが舞つたが、もう氣にするのも馬鹿馬鹿しくなつてきたので、持つていた箒でまた掃除をすることにした。

宴会のことも紫とアリスのことも文が戻つてくるまではどうにもならない。靈夢ができることは、宴会の準備をするために燃えカスで散らかつたこの境内を片付けることだけだつた。

「……めんどくさ」

そんな咳きとともに鳴つた腹の音が、無人となつた境内の哀愁を余計に引き立てていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6236p/>

夢幻の境界

2011年2月21日13時55分発行